

昭和二十三年

春昼や隣畑と高話

読み||しゅんちゆうや となりばたけと たかばなし

季語||春昼(春)

野良声という言葉がある。畑をへだてても会話が可能な大声で、百姓はこれが性となり、室内でも大声である。

春宵や花購う妻と並び佇つ

読み||しゅんしゆうや はなかうつまと ならびたつ

季語||春宵(春)

昭和二十三年の春と云うと、妻すなわち私の母ゆりは、私良知を身籠って殆ど臨月であった。これも韭崎にでも出かけた時の情景であろう。ゆりは生け花は日本古流を習っていた。

再び雲母へ投句を初む

虫おこし山薊に雨かわき初む

読み||むしおこし やままゆにあめ かわきそむ

季語||虫起こし(春)、山薊(夏) ||季違い

虫起こしは春の雷。冬眠している虫を目覚めさせる。山薊は野にいる蛾の卵の事で、本来は夏の季語である。

夕つづや春祭畢る大幟

読み||ゆうつづや しゅんさいおわる おおのぼり

季語||春祭(春)

夕つづは金星||宵の明星のこと。大幟はまだ仕舞ってないが、春祭りの夕方の風景である。

炭馬にくゝりし独活の一たばね

読み||すみうまに くくりしうどの ひとたばね

季語||独活(春)

炭馬という言葉が調べたが無い。何か特殊な馬という訳ではなく、炭俵を積んだ馬という意味のようである。独活の鮮烈な香りがするようない良い句である。

雪晴れの蒼穹にひびきて獅子の笛

読み||ゆきばれの そうきゆうにひびきて ししのふえ

季語||雪晴れ(冬)、獅子(新年) ||季重ね

獅子の笛とは虎落笛(もがりぶえ)||葦などの茎が冬の風に吹かれて笛のように鳴ること)の類かと、随分調べたが、獅子舞の笛以外の解釈には至らなかった。この句の光景も雪の後の穏やかな晴れの日であるからそんな、物凄い自然現象が起きると思えない。のどかな正月風景であろう。

荒ぶ日の花粉を空へ松大樹

読みⅡすきぶひの かふんをそらへ まつたいじゅ

季語Ⅱ花粉、松花粉(春)

黙禱ワールドの句である。

榮助は松の花が好きであった。私の結婚式は四月末だったが、その式場の庭園の松がきれいに穂を出し花が咲いていたと、後々も繰り返し言っていた。

中巨摩郡高尾山稲見神社

松の花八つ棟づくりという神楽殿

読みⅡまつのはな やつむねつくりという かぐらでん

季語Ⅱ松の花(春)

高尾山稲見神社という神社は無く、中巨摩郡高尾村の穂見神社の事と思われる。

八つ棟造りの神社というのは日光東照宮に代表される拝殿と本殿の間に屋根を架け、そこに石の間を設けた大規模豪華な神社建築の総称のこと。

穂見神社の拝殿本殿は八つ棟造りではないが、四方入母屋造りという神楽殿がある。説明者が間違えたか、榮助が聞き違えたか。

軒菖蒲巢ぐみの乙鳥くぐりくる

読みⅡのきしようぶ すぐみのつばめ くぐりくる

季語Ⅱ軒菖蒲(夏)

軒菖蒲とは家の軒から何本もの菖蒲の葉を垂らしたもので、端午の節句の習慣の一つ、四日に垂らし、五日には撒収する。

『すぐみ』は番(つがい)で巢を作っているの意味。

朝嵐しづまり垂るる軒菖蒲

読みⅡあさあらし しづまりたるる のきしようぶ

季語Ⅱ軒菖蒲(夏)

五月五日、端午の節句の朝の風景である。

翔ち光る風の穂麦の夕ひばり

読みⅡたちひかる かぜのほむぎの ゆうひばり

季語Ⅱ穂麦(夏)、ひばり(春) Ⅱ季違い

翔ったのは確かにひばりであろうが、ひばりが光ると言うのは変であるから、ひばりが飛び立った後の麦畑が風に吹かれ、穂麦が光って見えるという意味であろうか。季語と動詞の関係など、俳句としての解釈が難しい句である。

乙鳥嬉々と穂麦に腹をこすりとぶ

読みⅡつばめききと ほむぎにはらを こすりとぶ

季語Ⅱ乙鳥(春)、穂麦(夏) Ⅱ季違い

これも季語が重なっていると解釈できるが、穂麦は場を提供しているだけで主題はつばめである。腹をこすりとぶ、という表現は素晴らしい。ツバメは天気が悪くなる前には、低く飛ぶようになるそうである。

花柿の虫去り遅き夕べあり

読みⅡはながきの むしさりおそき ゆうべあり

季語Ⅱ花柿、柿の花(夏)

虫は蜂や蝶などの蜜を吸う虫であろう。夕方になって、それらの虫もいなくなつたのになかなか暗くならない。

アルプスの壁雪細り芽桑解く

読み||あるぶすの ひだゆきほそり めくわとく

季語||桑解く(春)

イギリス人の鉱山技師、ウィリアム・ゴランズが、日本の中部高地の三千メートル級連山を日本アルプスと言ったのは一八八一年、明治一四年のことだそうである。これはかのマッターホルン初登頂のたった五年後のことなので、既に百三十年の歴史がある。最初はアルプス紛いという意味であったとしても、今になれば立派なアルプスである。



坂井の村の西端、通称「やね」からの風風三山。目の前は約百メートルの崖で、下を釜無川が流れる。

黙榮の意識の主役の風風三山は赤石山脈即ち南アルプスの主山脈ではなく前衛峰であるから、これをアルプスと言って良い物かという疑問は残る。

昭和二十三年という時代、西山をアルプスと呼ぶ事に黙榮は新鮮さを覚えたのである。

春蚕(はるご)の掃き立ての頃である。

南下條所見

《南下條(みなみげじょう)は、藤井田圃がある藤井平の西で南端の村、七里ヶ岩に貼り付いており、葦崎の川原辺(かわらべ)村と隣り合っている。》

苗代の雨に芍薬影しづか

読み||なわしろの あめにしゃくやく かげしづか

季語||芍薬(夏)

苗代は春の季語であるがここでは芍薬の花という圧倒的な存在が光る。水を張った苗代に雨が静かに降っているが、その波紋は芍薬の姿を映すに邪魔にならない位静かである。

蟻通う梨の端枝の雨蛙

読み||ありかよう なしのはえだの あまがえる

季語||端枝(夏)、雨蛙(秋) ||季違い

端枝は元気の良いみずみずしい枝の意味。梨の木は表のゴールドンデリシャスの畑の中に二本並んであった。多分自家用であったと思うが品種が何であったか覚えていない。私は、子供の頃この梨の歯にざらつとすると感じが嫌いで、梨は自ら進んでは食べなかった。もちろん、食えと言われて嫌だきらいだと断れる立場ではなかったが。

舞鶴城

壕水に皺をたたみて松花粉

読み||ほりみずに しわをたたみて まつかふん

季語||松花粉(春)

桜の花びらが、壕などの静水に浮かぶ花筏は風流な現象として知られているが、黙榮は大好きな松の花に目をつけた。皺をたたみて、とはうまい表現である。深澤榮助は昭和二年(一九二七年)、この舞鶴城にあった時代の甲府中学に入学した。その年の夏、芥川龍之介が自殺した。これは文学少年榮助にとって衝撃的な出来事であった。

花茱萸にキラくまはる換気筒

読み||はなぐみに きらきらまはる かんきとう

季語||花茱萸花(春)

家の周りでのこの風景なのか考えても一寸思いつかない。ふと見えた景色のスナップショットであろう。

小麦花散る濡れ土に甘藷根づく

読み||こむぎはな ちるぬれつちに いもねづく

季語||小麦花(春)、甘藷根づく(春) ||季重ね

小麦は夏の季語であるが、小麦花そのものは季語とされていない。そのような微妙なものに都会の詩人は気がつかないのかもしれない。百姓榮助の目は濡れた土に小麦の花粉が散っているのに気付いたが、ここは甘藷根づく、を主題としていると取りたい。

家の周囲の畑に作る麦と山本田んぼは何故か小麦と決まっていた。小麦は刈ったらそのまま束ねて春蚕と夏蚕の間で空家になっている蚕室に運び

込み、田植えが終わった後、好天を見計らって庭で脱穀をした。小麦は薄力粉の小麦粉となって、おほうとうとおざら(うどん)に原料になった。市販の小麦粉ではなく、家でつくった小麦を挽いた小麦粉の方が上等で「内っ粉」と呼んで珍重された。麦の香りが違うとされた。

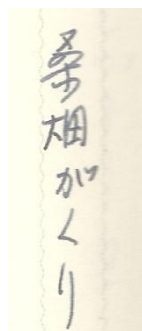
シビビーの桑畑がかり遠ざかる

読み||しびびいの くわばたけがかり とおざかる

季語||シビビー(夏)

しびびい、はカラスノエンドウというマメ科の植物、未熟の鞘の中の種を捨てて形を整えると草笛になる。甲州のみならず、上州出身の方に伺ったら、その方の田舎でもしびびいと呼んで鳴らすと教えてくれた。養蚕が盛んで、走ることを飛ぶと称する地域と重なるのは面白い。

この句の元は『シビビーの桑畑がかり遠ざかる』となっており、『桑畑がかり』がどうしても判らない。大きな辞書や古語辞典は勿論、民俗学、神道、仏教、甲州方言などの辞典にあたっても判らない。



「桑畑がかり」と読んで、視界が利かない桑畑の中で何書作業をしている所にシビビーを吹いている音が聞こえる。歩いている人が吹いているとみえて、音は移動し、やがて遠ざかって行った。というような光景であろうか。

稚蚕室出て花桐のすがくし

読み〓ちさんしつ でてはなぎりの すがすがし

季語〓花桐(夏)

卵から孵ったばかりの蚕はごく小さな毛虫(毛蚕〓けご)である。蚕は齡という五日から一週間の桑を食べて成長する時期と眠と呼ぶ約二日間の静止時期を四回繰り返す。眠から覚めると脱皮する。四眠あけの五齡となると猛烈に桑を喰い、十センチ弱の巨大な白い芋虫になり、一週間(夏蚕)から十日(春蚕)で繭を作る熟蚕になる。熟蚕になるとやや体長が縮み、体が黄色みを帯びて透き通り、盛んに頭を振る。これを「ひきた」と呼ぶ。

藤井小学校の先生も落ち着きのない子供達のこと「ひきたおぼこさんのようだ」と称して叱った。今、北東小学校でこんな事を言われても子供たちには何の事か判らないであろう。

毛蚕の初齡時には温度湿度餌としての桑の葉の状態などの管理が重要なので、近所と共同で特別の稚蚕室を設け、交替の徹夜で面倒を見た。桐の花が咲く季節であるから春蚕(はるご)で、春蚕の稚蚕室は暖房しかつ加湿しているのでむっとする。



土室共同稚蚕所前。昭和32年頃か。前列右端が榮助。懐かしい顔ばかり。

昭和29年に、稚蚕を10軒くらいが共同で飼育するための専用施設を建設した。年間条桑育など、その先進的養蚕技術により昭和36年の第1回農林水産祭の養蚕・蚕糸部門で最優秀賞天皇杯を受賞した。

袋掛け漸く暑き日にうみて

読み||ふくろかけ ようやくあつき ひにうみて

季語||暑き(夏)

袋掛けは果樹の未熟果に被害を防ぐための紙製の袋を掛ける作業で、この場合、桃か林檎であろう。袋は新聞紙より丈夫な電話帳用紙製で口金が糊付けしてある既製品を使った。袋掛けと同時に成長させる実を残して後は整理する摘果という作業も並行して行う。

倦むは飽きる、うんざりするの意味。そんなに暑かったか？。

雨意こめて瓜ばえ土を這いづれり

読み||ういこめて うりばえつちを はいづれり

季語||瓜ばえ(夏)

雨意はあめになりそうなようす。瓜ばえは瓜の蔓。胡瓜は棚づくりにするが、他の瓜類は地面に麦藁などを敷いてその上に這わせ、実を付けさせる。その麦藁からはみ出していく蔓もある。初夏の雨が近い、むっとするような天気である。

五月九日日蝕

《昭和二十三年五月九日の日蝕は、北海道の礼文島で金環皆既日蝕、即ち太陽と月のみかけの直径が完全に同じ時に起きる日蝕現象であった。蝕甚で皆既(真黒になる)、その後で金色の輪の金環蝕になる現象でかなり珍しい現象だった。甲府では部分食で、十一時半頃最大蝕八十パーセントであった。》

この頃小学生かそれ以上だった人には印象かったようで、日蝕と聞くと思い出すと言う人は多い。》

蝕甚やふとききとむる夏ひばり

読み||しよくじんや ふとききとむる なつひばり

季語||夏、夏ひばり(夏)

ひばりは春の季語であるが、五月九日は俳句では夏であるので、そこで聞いた雲雀の声は夏の雲雀で夏ひばりとなる。蝕甚は日蝕または月食で最も大きく欠けた最大蝕の状態を指す。

息を詰めて日蝕を見ていてふと雲雀の声に気が付いた。

水盤に欠け日輪と柿若葉

読み||すいばんに かけにちりんと かきわかば

季語||柿若葉(夏)

日蝕の太陽と言うのは、独特の影を作ったり、光の輪を作ったりする。そういった光景を見ているのだろうか。季語の柿若葉は、よくぞ詠んだり、である。

復円す日ざしはとみに夏めける

読み||ふくえんす ひざしはとみに なつめける

季語||夏めく(夏)

欠けの大きな日蝕は辺りが相当暗くかつ涼しくなるので、復円して戻って来た日差しは一段と強く感ずる。

私も一九九九年八月十一日のアルザスで、欠け率九十八パーセントの日蝕を見た経験がある。

二〇一二年五月二十一日朝の日本列島金環日蝕、私のいた横浜市港北区は残念ながら曇天で、雲が薄くなった部分に一瞬金環が見えただけだった。

五月二十五日 三男良知誕生

大火焚き産声を待つ五月の爐

読み〓おおびたき うぶごえをまつ ごがつのろ

季語〓五月(夏)

私は母の女の大厄である数え年三十三歳の時の生まれである。

現在でも主義で自宅出産する人がいると聞くが、戦後間もなくの山村では自宅出産が普通であった。私も日赤の従軍看護婦で支那戦線帰りと言うお産婆さんの手で文字通りの生家で生まれた。出生時の体重が一貫目もあり結構な難産であったらしい。この時の大変さを母は後々まで、陣痛促進のため舐めさせられたキナ皮の苦さに例えて「あんたはあの苦さでびっくりして出て来ただよ」と表現した。

三十四歳であった父は囲炉裏に火を焚きながら生まれるのを待った。夜になっても産声は聞こえず、焦燥感から季節外れの囲炉裏の火はどんどん大きくなっていった。

大火焚き産声を待つ五月の爐(昭和二十三年五月二十五日)

へその緒を切ったばかりの赤ん坊は箕に入れられ、夜中にも関わらず祖母の手で檀那寺の弘法大師像の前まで運ばれて捨てられた。赤ん坊は近所のおばさんに拾われ、お大師さんからの授かりものとして母の元へ届けられた。長兄は五歳に成長していたが、一家は戦争中に双子の女の子、終戦の秋に男の子とたて続けに亡くしていた。母親の大厄に生まれたこの赤ん坊には何としても育てて欲しい、とお大師さんにすがったのである。

(企業OB。ペンクラブ投稿エッセイから)



手前の囲炉裏が大火を焚いた爐。

榮助の師範学校の同級生橋田正光画伯の『涼風』

大土間から裏庭に出る大きな裏口を初夏の風が流れる。裏口から見える緑はいちじくである。

昭和二七年頃の作品。

薄暑光障子にみづこよく眠る

読み〓はくしよこう しょうじにみづこ よくねむる

季語〓薄暑(夏)

みづこ〓みづこは生まれたての赤子。

難産で、産声が聞こえたのは夜の十時だったという。出産直後、ゆりの女三十三の大厄落としての為、延命寺の弘法大師像の前に箕に入れて置き、近所の人にそれを拾って貰う、と言う儀式があった。この句はその戦いも済んで一夜明けての光景である。



取り上げ婆さんの金子貞子さん。日赤の看護婦さんだった。従軍経験もあると聞いたが、この制服も胸章も従軍看護婦のものではない。一時期の村のほとんど全部の赤ん坊がこの貞子さんにとり上げられた。

娘の汗の香のかぐわしき袋掛け

読み〓このあせの かのかぐわしき ふくろかけ

季語〓汗(夏)

袋掛けの対象は林檎であろう。ゴールドデンデリシヤス種の立派な木が十本くらいあった。娘は誰か?、東京から一家で疎開してきてそのまま帰る家が無くなり、お寺の一角に住んでいた芦澤さん一家の当時中学生くらいの娘達かもしれない。私は、そのひとり敏子さん「どこねえちゃん」に子守をして貰った。

初夏の荒雨たたく落大葉

読み〓はつなつの あらあめたたく ふきおおば

季語〓初夏、落〓ともに(夏) 季重ね

落があったのは、家の東側の竹藪の周り、馬伏場と呼んでいた畑の柿の木の下、オビの畑の土手、など。北海道や東北にある巨大な落ではなく、葉の直径、高さともせいぜい三十七センチの普通の落であった。これらの落は勿論食用にしたが、春先の落の臺よりも、若葉の茎の佃煮〓きやらぶき、が珍重された。きやらぶきは、弁当には付き物であった。はつ婆さんのきやら落は、表面に結晶が浮く位塩がきつかった。

虹の脚明るく麦は黄熟す

読み〓にじのあし あかるくむぎは おうじゆくす

季語〓虹(夏)

初夏の驟雨が上がって強い日の光が射し、虹が色づこうとしている麦畑の上に懸かっている。虹の脚の部分はことさらに明るい。さながらゴッホが描くプロバンスの風景の様な色彩の句である。

榮助は絵を描くのが好きでうまく、イーゼルも所持していて、水彩画も描いたりしたが、西洋絵画を鑑賞する趣味はなく、画集なども家には無かった。

大土間の朝冷えに鳴くつばくらめ

読み〓おおどまの あさびえになく つばくらめ

季語〓つばくらめ(春)

土間の上の梁にツバメが巣を作った。家の中にツバメが巣を作ると下が糞で汚れるので実際には迷惑であるが、どこの家でも巣を作って呉れるのを望み、巣を作ると大事にした。梁に板を打ち付けて手助けしたりもした。ツバメの出入りの為に日中の戸締りは出来ないが、当時の山村でそんな事は問題では無かった。

見ていると雛の餌に採ってくる虫は、青虫の類のみならず、大きなトンボやアブもあった。雛が巣の中で糞をすると親鳥が啗えて外に捨てる。雛が少し大きくなると、自分でおけつを巣の外に出して糞をするようになる。

熟れ麦にこもりて灯すほたるかな

読み||うれむぎに こもりてとます ほたるかな

季語||熟れ麦、麦熟る、ほたる||ともに(夏) 季重ね

川沿いにある麦畑の光景か。昭和二十年代ならまだ藤井田圃にも蛍が飛び交っていた。

痩せ桑の古実をこぼす土灼けぬ

読み||やせくわの ふるみをこぼす つちやけぬ

季語||灼けぬ、灼く(夏)

梅雨明けの早魃か。桑は乾燥に強い植物であるが、それでもあんまり照りが続くと木の勢いが弱る。昭和三十年代になると桑畑の雑草抑えと乾燥防止を兼ねて、藁束や蚕に喰わせた後の枝類などを畑に敷き詰めた。これを桑の被覆栽培と呼んだが、作業の邪魔になる事夥しいものであった。

蚕やぐらをひらひら渡る大百足

読み||こやぐらを ひらひらわたる おおむか

季語||百足(夏)

蚕やぐら、とは蚕棚ではなく、床面か地面に直接作った蚕座(きんざ)。やぐらの蚕への桑は枝のままあげる。当然枝の棒だけ残されるのでやぐらは高くなって行く、蚕も大きくなると蚕座を広げていく必要がある。そこで、休眠期に蚕座を拡げるが、その際古い蚕座を整理する。これは蚕座の乾燥を保ち、清潔にしておく意味もある。地面に蚕を放って逃げないのかという疑問を呈する見学者がいるが、蛾の幼虫は集団生活する習性があるそうで、人間が決めた区画から脱走する蚕はいない。



これは一九九四年の夏蚕の五齢で、欧州赴任の直前に挨拶に行った時の撮影。この時、塚原の伯父・伯母、乙黒の叔父・叔母にも挨拶に伺った。実際、塚原の伯父と乙黒の叔母とは永の別れになった。

榮助・ゆりは翌一九九五年も蚕を飼ったが、おそらくそれが最後の蚕である。その年、私はすでに欧州に赴任していたが、ブラジルから帰国した義姉の土屋一家が、まだ小学生だった子供達を連れて、榮助・ゆりを訪ねてくれ、最後の養蚕の様子も見届けてくれた。

花柿を群るる蜂はや明け易き

読み||はながきを むるるはちはや あけやすき

季語||花柿(春)、蜂(春)、明け易し(夏)||季違ひ

柿の花は、夜が明けるのが早くなったと思う春の終わりに咲く。薄いクリーム色の筒状の花で、かなり密集して咲くので奇麗である。樹木の白い花は蜜蜂が集まる。

「垣に赤い花咲く」という歌があるが、柿の花は白いと知っている田舎の子供達はみんな「柿に赤い花咲く」とは変な歌だと思っていた。穿って考える子は柿に何か赤い花が咲く蔓草が絡んだのだろう、などと深淵な解釈をしたりする。

花栗に梅雨入りの雲のうつとあり

読み||はなぐりに ついりのくもの うつとあり

季語||花栗、栗の花、梅雨||ともに(夏) 季重ね

この句の、下五の「うつ」の次の字は何と読むのか悩みに悩んだ。榮助はひらがな同文字繰り返し返しには「々」は使わず、「ゝ」を使うので、次の次の文字は々の崩し字ではない、とすると平仮名のとに見える。「うつとあり」という日本語があるかと随分調べた。

うつとあり

結局「うつとあり」を「現とあり」と解釈した。

栗の花の色と形に梅雨入りの雲とに相似性を認めたというフラクタル理論の句、という解釈である。梅雨入りが遅い年であったようである。

昼寝覚め淋しき夏至の日雨かな

読み||ひるねさめ さびしげしの そばえかな

季語||昼寝、夏至||ともに(夏) 季重ね

何故淋しいのかは判りかねる。

田植はつ空の眞澄に眞夏来ぬ

読み||たうえはつ そらのますみに まなつきぬ

季語||田植、眞夏||ともに(夏) 季重ね

田植えが終わると眞夏というのは藤井田圃の特徴である。藤井田圃も現在、田植えが早くなったので植えてから梅雨入りという感じになつてい。眞澄は、字の通り鏡のように奇麗に澄んでいるようす。

苗すゝぐ堰満々と朝日満つ

読み||なえすすぐ せきまんまんと あさひみつ

季語||苗すすぐ(夏)

苗代から抜いた苗は直径五センチ程に束ね、流水ですすいで、根の土を洗い流し、百束くらいをひとまとめにして扱う。

田植えは百姓最大のお祭りである。さあ、今日は田植えだと高揚した気持ちたちが伝わってくる。

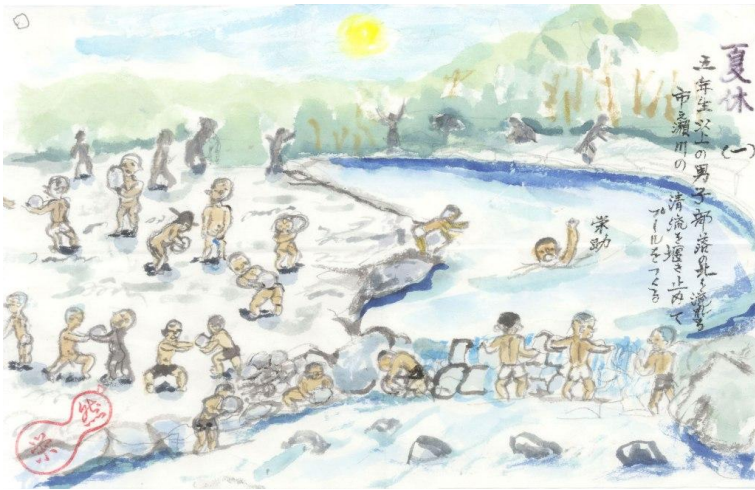
泳ぎ子の炎天もどる唇褪せて

読み〓およぎこの えんてんもどる くちあせて

季語〓泳ぎ、炎天〓共に (夏) 季重ね

坂井の子供の泳ぎ場は黒沢の富麻戸神社の参道下の橋付近と決まっていた。用水路に水を回す為には川の流れをせき止めたのでかなりの水位に水が溜まり、子供の水遊びの場となった。

この句は、そう言う場所の写生というより、榮助の子供時代の回想である。



榮助少年記から

「夏休み 一 泳ぎ場作り」

小学校五年になると、子供たちが夏休みに近くの川を堰き止めて泳ぎ場を作った。

榮助五年の時を描いた絵で、働く六年生を尻目に早くも水溜りの具合を調べるとして泳いでいる。

榮助の故郷の落合村塚原は山に近いので川の水は冷たい。炎天でも唇褪せるといふ状態になったと思う。

榮助少年記は九十歳位の時、少年時代を回想して描いた約二十枚の水彩画からなる。

短夜や桶の山百合開き初む

読み〓みじかや おけのやまゆり ひらきそむ

季語〓短夜、山百合〓共に (夏) 季重ね

山百合は裏の竹藪の縁にあった。短夜と山百合で季重ねであるが、短夜や、で強く切って状況を示し、その中で山百合が咲いているので、山百合が季語であり、主役である。季重ねの弊害は無く、きれいにまとまっている。どこことなく、艶めかしさを感じる句である。

藤袋の滝

龍神の幣をあほつ滝しぶき

読み〓りゅうじんの きてをあほつ たきしぶき

季語〓滝 (夏)

にきてをあほつ、などは生易しい学問で出る言葉では無い。黙榮句の特徴の一つで、連れ合いのゆりが喝破していた「難しい事を言つて脅かす」句である。弊(へい・にきて)は紙を細長く切った神域の飾り、あほつは煽つてあおるである。勇壮な滝を連想するが、実際の藤袋の滝はそんな大規模な滝ではない。

藤袋は境川村藤袋。学校がある小黒坂から沢浴いに遡った所にある部落である。この向昌院というお寺の境内の高さ一メートルばかり、横に広い簾の様な滝。小さいが清流で、一年中水温が十二度程度で変わらないとあって今でも名水として知られる。

青柿に祭提灯灯ともりぬ

読み||あおがきに まつりぢようちん ひともりぬ

季語||青柿(夏)

天王社は津島大社を招聘した神社で、ご利益は疫病除け専門である。その祭礼は「祇園さん」と優雅な名前と呼ばれる。祭礼日も有名な京都八坂神社と同時期、七月末の真夏で、柿の実がようやく青く目立ち始める頃である。

これは田植えが終わり、夏蚕が忙しくなる直前という一瞬の間をついた絶妙な時期なのである。

片倉製糸所見

バラ垣にハモニカ洩るる寮は夏

読み||ばらかきに せいしゅんのうた りようはなつ

季語||薔薇(夏) 夏||共に(夏) 季重ね

片倉製糸||繭から生糸を取る工場、は当時の葎崎にも工場があった大企業で、スイッチバック駅であった葎崎駅の東側に大きな敷地を持ち、高い倉庫が立ち並んでいた。養蚕が衰退していくと肌着の工場となり昭和五十年代頃まで操業していた。昭和四十年頃でも片倉の女子寮というのは華やかな存在だったので、女工さんが主役の製糸所時代の片倉の寮といったら、宝塚のようなものであったであろう。天王社祭礼の頃の束の間の農閑期に見学にいったものか。

先に書いて、次にハモニカの句を書いたが、消去線を引く事無しに残した元の句。

昼蚊帳の一すみ外し暑気当り

読み||ひるかやの ひとすみはずし しよきあたり

季語||蚊帳(夏)、暑氣中(夏) ||季重ね

体を労わる養生らしい事は一切せずに九十六歳まで生きたのであるから榮助は丈夫であった。実際生涯で入院したのは若い頃の痔と、脳梗塞で倒れて死の床となった最後の一週間だけであった。宿願の難聴の他に心臓が悪い(不整脈?)と称したが、本当に心臓が悪かったらあんなに不摂生で長生きは出来まい。

酒飲みであったが、底無しに飲む、というほど強くはなかった。ただし、当人の弁によると、二日酔いという現象は知らない、という事であった。それでも時々、腹具合が悪い、位の事は言つてさぼった。私も覚えてい

今年藤井田圃に誘蛾燈設置

蛙声更け地平の星と誘蛾燈

読み||あせいふけ ちへのほしと ゆうがとう

季語||蛙(春)、誘蛾燈(夏) ||季違い

紫外線ランプで昆虫をおびき寄せ高圧の電撃で殺す誘蛾燈というのが今でもあるが、ここで藤井田んぼに導入されたと言っている誘蛾燈は灯油か何かのランプで虫を集め、ランプの下の水槽に落とす古典的なものである。電燈の類と言っても田んぼの真ん中では電源がない。

畦豆の花ほつほつと土用明け

読み||あぜまめの はなほつほつと どのようなあけ

季語||土用明(夏)

畦豆は田んぼの畦に植えた大豆。畦がコンクリート化される前は、田に水を張る為に、泥土を盛り上げて畦を作った。その畦に大豆を植えたのである。畦がまだ柔らかいうちに棒で適当な間隔で穴を開け、大豆を二三粒づつ転がし込んで周りの土で蓋をする。豆撒きは子供の仕事だった。ほつほつとは一斉では無い、ぼつぼつと、の意味。

白蓮の花清麗に朝曇り

読み||しろはすの はなせいれいに あさぐもり

季語||蓮の花(夏)

近所には蓮の花が咲くようなところはないし、朝の句であるので、どこかに泊つての朝であろうか。ゆりの実家の乙黒かもしれない。曇り空の方が、光の色温度の関係で、花の色はより白く見える。

褪せそめし田づら秋立つ風白し

読み||あせそめし たづらにあきたつ かぜしろし

季語||秋立つ(秋)

田づらは田列、田んぼの列なり、一面の田んぼの風景であろう。田んぼの緑が、夏の終わりになると薄くなり、それがやがて黄金に色になる。初秋の田んぼを「褪せそめし」と詠んだところは毎日田んぼを見ている百姓の感慨であろう。

《ここから、盆の句が六句並ぶ。昭和二十三年の盆、想像であるが、満州、支那、さらにはニューギニア、レイテと海を渡って戦場に行った若者たちの消息がはつきしり、帰還する者、骨だけが戻る者、一片の紙だけで戦死が知らされる者、様々で、特別に感ずるものがあつたのであろう。》

盆の月桑の高枝にスイト鳴く

読み||ぼんのつき くわのこうしに すいとなく

季語||盆(秋)、すいと||馬追||スイトチヨン(秋)||季重ね

情景は良く判るが、季語が並んでごたついた句である。後徳大寺のホトトギスのように、スイトが鳴いた方を見たら月が見えたのか、月を見ていたら、高い所でスイトが鳴いているのに気がついたのか。

芥焼く煙墓山に盆仕度

読み||あくたやく けぶはかやまに ぼんじたく

季語||盆仕度(秋)

盆を迎える為に、墓の掃除をしているのであろう。煙は甲州風に「けぶ」と読みたい。墓の掃除というのはごくたまにしかしなかったと思う。お盆と十月の新家との合忌前はやったが、他の機会にはどうであったか。

踊りの輪遠くしづもる兵の墓所

読みⅡをどりのわ とおくしづもる へいのぼしよ
季語Ⅱ盆踊り(秋)



兵の出征。昭和十年頃か。
この送られている兵、五味節三氏は支那戦線で戦死、帰還しなかった。
後列左から三人目学生服姿の末弟大礎氏は、昭和二十年四月、沖繩近海で九七戦で特攻戦死した。大礎氏の右隣の次兄はシベリアに抑留されたが帰還した。
前列で節三氏の右隣が、泰元に螢を呉れた五味千代蔵翁。

盆礼や草深き灯をめあてにて

読みⅡぼんれいや くさふかきひを めあてにて
季語Ⅱ盆礼(夏)

遺母独り蠅と盆供侘びしがり

読みⅡいぼひとり はえとぼんぐ わびしがり
季語Ⅱ盆供(秋)

侘びしいⅡ心が慰められないさま。心細い。つらく悲しい。やるせない。
前の句と対の新盆のお見舞いの句である。母が遺されているので、戦死が明らかになった兵士の新盆かもしれない。

盆のお供えに蠅がたかっている。昭和三十年代でも蚕の為に殺虫剤の使用を控えていたせいで蠅は相当いた。

百姓になれて土俗の盆踊り

読みⅡひやくしようになれてどぞくの ぼんをどり
季語Ⅱ盆踊り(秋)
「なれて」は慣れてである。榮助、百姓になって三回目の盆踊り。

どっちにするかかなり迷った形跡のある元句

『土の業嗣ぎて土俗の盆踊り／黙榮』

かりそめに病みて花卉透く秋蚊帳に

読みⅡかりそめに やみてかきすく かきかやに
季語Ⅱ秋蚊帳(秋)

榮助は極めて丈夫な人であった。ただ、先にも述べたように、風邪も引かず、腹痛もおこさないというタイプではなく、時折一寸寝込むという事はあった。

くさぎらぬ畑草は実に茗荷咲く

読みⅡくさぎらぬ はたくさはみに みようがさく

季語 若荷の花 (秋)

草刈をしない畑の様子。草に実が生ったり、若荷の花が咲いてしまつては駄目だろう。

良知百日の祝

新涼や子に据え祝う百日膳

読み しみしんりようや こにすえいわう ひやくにちぜん

季語 新涼 (秋)

昭和二十三年九月二日。

良知百日。

素人写真では無く、プロに撮って貰っている。有り難い事である。

写真の右に書き込まれた日付などはゆりの手である。



山の童に長き夏ゆく法師蟬

読み しみやまのこに ながきなつゆく せみほうし

季語 法師蟬 (秋)

童というのは少年すなわちある程度成長した子供の事であろうから、この主役は生後百日の、童としても新米の良知では無く、ベテラン童の泰元

であろう。

つくつく法師は八月に入らないと鳴かない蟬で、この蟬が盛んに鳴くようになると夏も終わりである。

日は閑か澄みてかさ減る出水川

読み しみひはしずか すみてかさへる でみずがわ

季語 出水 (夏)

藤井平の川は、農業用水のみで、大河川は無かったから、天気や、水の需要で大きく水位が変わった。冬などは水の無い水路が数多くあった。

帰燕とびみどり児の瞳のすずやかに

読み しみきえんとび みどりごのめ の すずやかに

季語 帰燕 (秋)

良知は、縁側にでも寝かされているのであろうか。

秋繭える身に添う影とありにけり

読み しみあきまゆえる みにそうかげと ありにけり

季語 秋繭 (秋)

えるは選る。もずから外した繭は、毛羽取り機という機械(道具?)で毛羽を取りながら、中の蚕が死んでいる物、形の悪い物、大繭と言って二匹の蚕が共同して作ったもの、そして何より残念な、蚕の排泄物などで汚れてしまった繭などを取り除いていく、それらの繭も製糸所は引き取るが値段が安いのである。また、そういう、欠陥繭が良品に混ざると信用問題になるので、かなり気を使って峻別した。

紫蘇は実に土に影してあきつとぶ

読み〓しそはみに つちにかげして あきつとぶ

季語〓あきつ (秋)

あきつ〓蜻蛉を季語にとりたいが、濃密に季節を語る紫蘇の実が邪魔になる。もう少し適当な対象物はなかったのか。トンボの影というのが新鮮。

新涼や掌にして小さき初卵

読み〓しんりようや てにしてちいさき はつたまご

季語〓新涼 (秋)

ひよこの季節は春であるが、新涼の季節には、早や卵を産むのであろうか。確かに、産み始めの卵は小さい。

おのが影だきしむるかに秋の蠅

読み〓おのがかげ だきしむるかに あきのはえ

季語〓秋の蠅 (秋)

日溜りにとまっている秋の蠅。自身の影が濃く写っている。

『庭土に臯月の蠅の親しさよ／餓鬼・龍之介』

寒風呂に老いさらばえし身を沈む

読み〓かんぶろに おいさらばえし みをしずむ

季語〓寒、寒風呂 (冬)

榮助三十四歳。かなり自虐的な句である。

昭和二十三年晩秋より冬へ

東大

医学部へ大学の道黄落す

読み〓いがくぶへ だいがくのみち こうらくす

季語〓黄落 (秋)

黄落は、木の葉や果実が黄色に色づいて落ちること。

赤門は固く鎖されて秋落暉

読み〓あかもんは かたくさされて あきらつき

季語〓秋落暉 (秋)

落暉は入日のこと。

この秋東京裁判判決下る車中にてきく

《東京裁判の判決は十一月十二日であった。そして同年十二月二十三日にA級戦犯の七人が処刑された。》

車中にて聞くとある。携帯電話は勿論、携帯ラジオも無い時代であるから、車中で号外でも持っていた人から聞いたのであろう。》

灯る汽車悼む心に枯野ゆく

読み〓ともるきしゃ いたむこころに かれのゆく

季語〓枯野 (冬)

裁かれし人秋逝くころかな

読み||さばかれし ひとあきゆく ころかな

季語||秋行く(秋)

東京裁判の判決に際し、わが父榮助も言いたい事はあったであろうが、「ざまあみろ」的な感想を述べなかつた事は救われる。

今日の視点では、勝者が事後立法で敗者を裁いた東京裁判の違法性について意見を述べても異端視されないが、この時点の一般市民の間ではGHQの報道管制と洗脳のもと、ただただ、戦勝国の言いなりになるしかない、という考えが大部分であったであろう。

榮助も法学の素養はないので、東京裁判については、勝者に開戦時の指導者が裁かれる無念さは感じていても、裁判そのものに疑問は抱かなかつたであろう。

昭和二十三年終り